

ポータルランドとミドルメディア：ハックされたインターネットの都市表象

藤代, 裕之 / FUJISHIRO, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

68

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2021-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025092>

ポータルランドとミドルメディア

——ハックされたインターネットの都市表象——

藤代裕之

1. はじめに

「ミドルメディア面白いですね。自分がやってきた都市研究では公園が都市のミドルメディアに当たるかもしれません」。多摩キャンパスの研究室で矢部恒彦さんはそう話した。ミドルメディアを軸にした研究構想は土橋臣吾さんと3人の研究調査助成の申請につながり、その成果の一部は『アフターソーシャルメディア』（日経BP）に収録された。しかしながら、都市とミドルメディアというテーマは矢部さんの留学と急逝で取り掛かるタイミングを失ってしまった。本稿では、矢部さんが留学先のポータルランドを対象に行った都市表象研究を手がかりとして、「オープンソース・ジャーナリズム」の手法を用いながら都市とミドルメディアについて検討してみたい。

2. ミドルメディアとは何か

まず、ミドルメディアについて説明する。ミドルメディアは、筆者が2006年に着想した情報流通構造である（藤代 2014, 2017）。2000年代に入り、誰もが簡単にソーシャルメディアで情報を発信できるようになり、ブログ、掲示板、Twitterなどに情報が溢れるようになった。これらソーシャルメディアの情報を元に記事を書くニュースサイトや話題を取り上げるまとめサイトが生まれ、それをミドルメディアと名付けた。ポータルサイトに記事を配信したり、まとめサイトが取り上げた話題をテレビ番組が放送したり、ミドルメディアからマスメディアに話題が広がるようになった。

ミドルメディアには、①ソーシャルメディアの話題をマスメディアに届ける、②マスメディアの話題をソーシャルメディアに届ける、③マスメディアの話題とソーシャルメディアの話題を組み合わせる、の3つの役割がある＝図1（藤代 2021）。

図1が三角形なのはメディア数と拡散力（影響力）を示している。ソーシャルメディアであるTwitterやInstagramの投稿は膨大に存在するがひとつひとつの拡散力は小さい。マスメディアは、数は少ないが拡散力は大きい。なお、図1におけるマスメディアは、新聞やテレビといった既存のマスメディアとイコールではない。インターネットではヤフーなどのポータルサイトの拡散力が大きくマスメディアに位置づけられる。

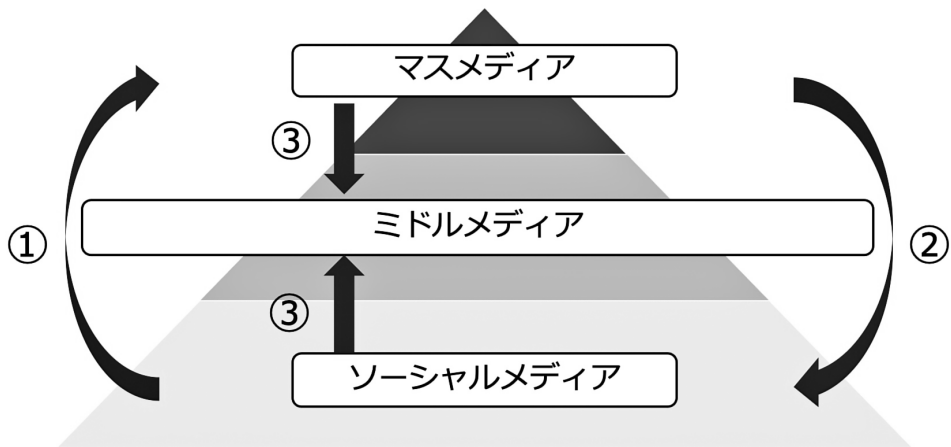


図1. ミドルメディアの役割。『フェイクニュースの生態系』図2と図6元に筆者が作成

ミドルメディアを中核としたインターネットにおけるニュースの流れは、フェイクニュースのような不確実な情報の拡散要因でもあるが、これまで既存のマスメディアに紹介されなかったオルタナティブな話題を取り上げることにもつながった。都市とソーシャルメディアについては、ツイートのテキストマイニングを行い感情表現から都市イメージの可視化を行った研究があるが（小池・渡辺 2012）、都市とミドルメディアの関係は十分に検討されていない。

3. インターネットにおける都市表象

検討の手がかりとなる矢部さんの都市表象研究は、留学先であるアメリカワシントン州ポートランドから帰国して2019年に執筆した『続「ポートランド」ロマンス都市の誕生：―「まちづくりは、つちづくり」ではなく、表象インフラ整備とコンド誘致、観光客への戦略的広報―』の第二部「ポートランド」その＜空間表象＞構築と同市のPR戦略―日本語ウェブページのテキスト分析（以下「第二部」と記載）である。

「第二部」の冒頭に記載された目的と背景には、「近年、紙媒体やテレビ・映画の映像に替わって、ウェブページやSNS等のインターネット・メディアのなかの都市表象が爆発的に増えている」「米国北西部オレゴン州ポートランドを扱った日本語ウェブページに着目し、ポートランドの＜空間の表象＞を明らかにすることを目的とする」（位置No.310 位置Noは ipad で Kindle を作動させた際のもの）と記載されている。ポートランドのインターネットでの表象を批判的に捉え、「日本におけるポートランド神話の解体と再構築を目指す」（位置No.337）ものである。

調査手法は、「計量的なウェブ・メディア研究と、バルト以降のテキスト分析を組み合わせ」（位置No.351）であり、ポートランドに関するサイトを Google で検索。表示されたサイトのタイトル、リード文、URLの項目を確認し、意味作用の概要を読み解き、要素的な空間をマッピングしている。

ポートランドに関心を持った人はインターネットを検索する。そこに表示されているサイトを分析することでポートランドの都市表象を明らかにしようという試みである。検索結果はインターネット利用者に大きな影響を与えると考えられるが、日常的であるゆえに「ランキングというメディアによって誘導されていることを、ほとんど意識していない」(宇田川 2019)ことを考えれば、検索結果における表象は重要なテーマといえるが、ほとんど取り組まれていない。

「第二部」では「おしゃれでエコなりノベーション」という誤解が煽られたことにより、ポートランドは「エコ精神とクリエイティブな商業主義が両立したかのような理想都市として紹介されるようになった」(位置No.742)と矢部さんは結論を述べている。

これらの記述から、留学前に矢部さんと交わしたやり取りを思い出す。サバティカルでポートランドに行くと聞いた時、「意識が高い街ですね」と懐疑的なコメントをしてしまったのだ。ポートランドやブータンなどを先端的な街づくりと結びつけて語る人たちを、どことなく本質的ではないと感じていたからだ。それに対する返答は「そうやって語られているポートランドを暴いてみたいと思っています」とにやりとしたのだ。そんな矢部さんの詳細な分析と結論は前掲書や『住んで協働してわかった「米国オレゴン州ポートランドのまちづくり」の仕掛けと、ぼくたちへのヒント』を読んで頂きたい。



図2. 「(誤解された) ポートランドらしい」と矢部さんからコメントをもらったポートランドの写真。中央の車両は路面電車ではなくMAXと呼ばれるLRTで、「表象構築としてまったく異なる要素的空間のはずの両者は公共[交通]機関として混同され、DN「市民参加」「公共性」や「エコ」という誤解を招く」(位置No.561)。2018年8月筆者撮影。

4. 検索結果に表示されるミドルメディア

本稿の目的は、「オープンソース・ジャーナリズム」¹の手法を用いてインターネットにおける都市表象とミドルメディアの関係を明らかにすることである。「オープンソース・ジャーナリズム」は、ソーシャルメディアの投稿や企業や政府の発表、各種サイトなどオープンな情報を分析する調査報道手法である。

「第二部」で矢部さんが収集し、分析対象とした13サイトを改めて確認し、サイトの種類などを分類した。確認日は2021年10月12日である。「第二部」の表3に提示されていたサイトについて時系列に直したものが表1である。公開年月は、各サイトに表示されている更新日付を参考にしたが、更新日付がない場合はサイトが扱ったイベントの開催日を記載している。アクセスできず公開された年月日が確認できなかったサイトが4件あった。確認できた最も古いもので2013年、13サイト中4サイトが2018年で、そのうち3サイトは7月と8月に公開日が集中している。

表1. 『続「ポートランド」ロマンス都市の誕生: —「まちづくりは、つちづくり」ではなく、表象インフラ整備とコンド誘致、観光客への戦略的広報—』の表3を元に筆者が作成。ミドルメディアをグレーで表示している。

表3のid	公開年月	サイト	タイトル	内容
id6	2013年4月18日開催	BAUM LTD.	グリーン・アーバン・イノベーション—ポートランドに学ぶグリーンシティのつくり方とつかい方	イベント告知
id5	2016年6月14日開催	まち座	[レポート] 日本とポートランドのエリアリノベーション 馬場正尊×山崎満広	イベントレポート
id8	2017年1月20日(2020年5月2日更新)	TABIPPO	全米一住みやすい都市「オレゴン州ポートランド」の真実	まとめ記事
id13	2017年4月29日出版	Amazon	ポートランド・メイカーズ クリエイティブコミュニティのつくり方	本
id3	2017年11月29日付け	愛知県東浦町	オレゴン州ポートランド研修レポート～O-JaLoGoMaに参加して	研修レポート
id4	2018年7月23日	FINDERS	全米で最も住んでみたい都市・ポートランドの迷いと葛藤【ブックレビュー】	書評
id9	2018年8月9日	ハフィントン・ポスト	〈暮らしやすさ〉の都市戦略、ポートランドの魅力を読み解く	出版した本の紹介
id10	2018年8月28日	ジモコロ	まちづくりの王様！ポートランドはなぜスゴいのか調べてみた	まとめ記事
id11	2018年12月5日	コロカル	住まいも仕事も決めず、ポートランドへ移住!? 山中緑さんの冒険の旅のお話会、美流渡で開催	イベントレポート
id1	アクセスできず	旅行代理店	コバタクと行く、ポートランドツアー ツアー情報 - ジェイエスティ	
id2		庭園のサイト	ポートランド日本庭園へようこそ - Portland Japanese Garden	庭園の日本語紹介
id7	アクセスできず	NAVER まとめ	全米住みたい街No.1 オレゴン州ポートランドってどんな所?	
id12		ツアー会社	US-J Connect	スタッフ紹介

¹ https://en.wikipedia.org/wiki/Open-source_journalism

13サイトには新聞記事など既存メディアのサイトがないのも特徴的である。その一方で、ここ10年ほどで新たに生まれたウェブメディアが多く含まれている。サイトの構成や記事内容を確認してミドルメディアと判断したサイトをグレーで表示している。旅行ツアーやポートランドの日本庭園の公式サイトのような観光に関連するもの以外は、まちづくりに関連する内容が記載されたサイトが多く、そこにはミドルメディアが多く含まれている。なお、id7はアクセスできないが、韓国企業であるNAVERが運営し、2020年にサービスが終了したNAVREまとめであることがURLから明らかであるため²ミドルメディアに含めている。

ミドルメディアのうち、既存メディアに関わるのは、id9のハフントン・ポスト（日本版）とid11のコロカルである。ハフントン・ポストは2013年に朝日新聞と合併会社としてスタートした³。コロカルは雑誌社のマガジンハウスが地域をテーマに2012年に開設したウェブメディアである⁴。

id4のFINDER（ファインダーズ）はクリエイティブ×ビジネスをテーマに2018年に開設された⁵。id8のTABIPPOは株式会社TABIPPOが運営する旅の総合メディアで開設年は不明である⁶。id10のジモコロは求人企業のイーアイデム、コンテンツ制作会社バーグハンバーグバーグ、編集プロダクションHuuuuが運営するウェブメディアで2015年に開設されている⁷。

5. ミドルメディアにおけるポートランドの表象

次に「第二部」に記載された各サイトの記述への分析を参照にしながら、ミドルメディアの記事に描かれるポートランドの表象を明らかにする。

id4FINDERの記事⁸はポートランドを特集した『MEZZANINE（メザニン）VOL.2』（トゥーヴァージンズ）の書評で、筆者は映画監督の神保慶政氏。最初の見出しは「憧れの町の苦悩」で、記事の書き出しは「アメリカ・オレゴン州最大の都市であるポートランドは、ライフスタイルや都市計画において理想的なモデルとして語られることが少なくない。しかし、どんな成長にも終わりが来る。」である。『MEZZANINE VOL.2』の編集者は同編集長の吹田良平氏である。書籍の表紙は「「米国都心部の社会問題」を提起している」（位置No.586）。

id8TABIPPOの記事⁹はポートランドの概要を紹介したものだ。執筆者は「Jun. N」というハン

² <https://www.asahi.com/articles/ASNB14HN5NB1UTIL014.html>

³ <https://www.huffingtonpost.jp/static/huffingtonpostjp-about-us>

⁴ <https://colocal.jp/about/>

⁵ <https://finders.me/about/>

⁶ <https://tabippo.net/about/>

⁷ <https://www.e-aidem.com/ch/jimocoro/>

⁸ <https://finders.me/articles.php?id=285>

⁹ <https://tabippo.net/portland-secret/>

ドルネームで実態は不明である。同じハンドルネームで、TABIPPO サイト内に約30件の記事を執筆している。対象となった記事に出典は提示されておらず、「実際に行った感想としては」と書いているものの、写真はインターネットに公開されている素材写真が使われており、執筆者が撮影したとみられる写真はゼロである。真実という大げさなタイトルではあるものの「薄い記述」(位置No.523)である。記事の最後には記事からリンク先に遷移して購入すると手数料収入が得られるアフィリエイトが設定されている。

id9 ハフントン・ポストの記事¹⁰ は保坂展人世田谷区長の寄稿で、保坂氏が執筆した書籍『暮らしやすさの都市戦略——ポートランドと世田谷をつなぐ』(岩波書店)の内容を抜粋したものだ。冒頭には素材写真が配置され、記事の最後には書籍へのリンクが貼られている。このリンクはアフィリエイトではない。記事は「2015年11月、私は初めてアメリカのオレゴン州ポートランドに出かけました。」という書き出しで始まる「観光旅行ベースの薄い記述のブログ記事」(位置No.498)であり、「観光旅行ブログを素材として、誤解あふれる入門者むけ表象を再生産している」(位置No.523)。

id10 ジモココの記事¹¹ は、ポートランドの魅力を探ったもので「先進的なまちづくりを進める都市として、世界中から注目を集める町、ポートランド。その魅力を探るべく、編集長・柿次郎が現地へ突撃！」したと記事のリード文で書いている通り、現地取材を行っていることが掲載された写真で確認できる。カフェやクラフトビールを紹介した後、ポートランド在住のコーディネーター山本彌生氏にインタビューを行っている記事は「アンティーク店コンテンツにある「工芸」と「DIY」の夢想的な混同は、プロの取材というよりは観光客の誤解のようだ」(位置No.623)と手厳しいが、編集部に対し「彼らも直感的に、今日日本で流通する当市表象の虚構性は理解しているようだった」(位置No.623)とも付記している。記事の最後には山本氏が編集に関わったという『プレイス・ブランディング』有斐閣のリンクが紹介されている。このリンクはアフィリエイトではない。

id11 コロカルの記事¹² はポートランドに移住した元タウン誌編集者の山中緑氏が一時帰国した際の報告会のレポートである。執筆者は『美術手帖』美術出版社の副編集長などを務めた来嶋路子氏である。山中氏が撮影した写真とともに実体験が語られる記事は「踏み込みに成功した事例」(位置No.623)と評している。

このようにミドルメディアの記事は一部を除き「おしゃれでエコなりノバージョン」をなぞっている。これに対し、「ポートランド流行りが続くのであれば、メディア関係者による「東郊」の要素的空間における日常的「DIY+エコ」のジャーナリスティックな紹介が期待される」(位置No.635)と結んでいる。

¹⁰ https://www.huffingtonpost.jp/nobuto-hosaka/portland-20180809_a_23498959/

¹¹ <https://www.e-aidem.com/ch/jimocoro/entry/yowami02>

¹² https://colocal.jp/topics/lifestyle/ecovillage/20181205_119853.html

6. ポートランドに関するマスメディアの報道

13サイト中4サイトが2018年に公開されており、すべてミドルメディアであった。そのうち3サイトは7月と8月に公開日が集中していた。ミドルメディアには、ページビューを獲得して広告収入を得ようとするサイトが多くある（藤代 2021）。そこで、この時期になんらかのイベントが発生し、社会的な注目が集まったことでページビューを獲得できる状況が生まれ、記事の公開が集中したのではないかと仮説を立て、既存メディアの報道を確認することにした。

新聞や雑誌の記事を横断的に検索できるGサーチを使い、キーワード「ポートランド」で2018年の記事を検索した。調査日は2021年10月15日である。検索結果は700件で、ゴルフ、バスケット、マラソンといったスポーツ大会に関する記事が大半で、大きな事件や事故を見出す事はできなかった。まちづくりに関連する記事を表2にまとめたが、イベントの告知やレポートが多かった。

表2. 2018年に「ポートランド」に関して報じた記事のうちまちづくりに関連するもの。筆者がGサーチの調査結果から作成

id	日付	媒体	タイトル	内容
2-1	2月28日	毎日新聞 東京朝刊 経済面	経済観測：中心市街地活性化法の役割＝ローカルファースト研究所代表取締役・関幸子	寄稿
2-2	4月4日	毎日新聞 地方版／東京	毎日メディアカフェ：持続可能な地域、米ポートランド セミナーで報告	イベントレポート
2-3	5月31日	毎日新聞 東京地方版／茨城	つくば駅周辺「未来図」求む 中心街再生へ市が募集	「まちづくりヴィジョン」案に対するパブリックコメント募集
2-4	6月27日	西日本新聞	福岡県／官民で将来像の共有を 若松 学生や区長ら意見交換	大学生がポートランドの事例を紹介
2-5	6月30日	朝日新聞 東京地方版／東京	米ポートランドと世田谷、交流もっと深く協会発足	イベント告知
2-6	7月19日	中日新聞	米視察の県議団 報告書を書籍化	報告書の紹介
2-7	9月19日	東京新聞 特報2面	米国に学ぶ街づくり 世田谷区長が本出版 ポートランドで市民自治視察 住民参加 社会のかぎに	出版した本の紹介
2-8	10月30日	建設工業新聞 新潟版	まちづくりの理解深める／県建築士会長岡が講座開く	イベントレポート
2-9	11月9日	西日本新聞	都市ロープウェー 是非は 福岡市長選 争点に 現職高島氏「渋滞緩和に必要」 新人神谷氏「暮らしにお金を」	選挙報道
2-10	11月14日	毎日新聞 地方版／和歌山	講演：「智」大切に、米国のまちづくり 渡部・和大付属図書館長が紹介 18日・県立近代美術館	イベント告知
2-11	11月17日	新潟日報	米ポートランドを住み良さの参考に まちづくり講演会	イベントレポート
2-12	11月19日	北日本新聞	魚津の未来語り合う 商議所青年部シンポジウム 日米専門家講演 「持続可能」な活性化策探る	イベントレポート

具体的に確認していくと、4月に「毎日メディアカフェ：持続可能な地域、米ポートランド セミナーで報告」（『毎日新聞』2018.4.4 朝刊，東京）というイベントの報告記事がある。このイベ

ントの登壇者は id10 のインタビューに登場した山本氏と、新潟大学の長尾雅信准教授である。記事には、地産地消、路面電車、クリエイティブなどが掲載されている。

5月には茨城県つくば市が「まちづくりヴィジョン」の案を公表し、パブリックコメントを募集していること、案の公表に合わせてシンポジウムが開催されたことが報じられている。「五十嵐立青市長と、米国・ポートランドの街づくりに携わる市まちづくりアドバイザーの山崎満広氏、筑波大の藤井さやか准教授の有識者2氏によるシンポジウムが開かれた」（『毎日新聞』2018.5.31 朝刊、茨城）。

6月の福岡県は北九州市若松区の今後についてビジョンを共有する取り組みが行われたことを紹介する記事で、大学生が留学先のポートランドの事例を紹介している（『西日本新聞』2018.6.27 朝刊）。

東京都世田谷区に関しては2本の記事がある。6月には「世田谷ポートランド都市文化交流協会」を発足させるという記事（『朝日新聞』2018.6.30 朝刊、東京）。この記事には「リノベーションを多用した再開発」「自然に囲まれた中で車に過度に依存せず」といった記載がある。9月には保坂展人世田谷区長がポートランドについて書いた『暮らしやすさの都市戦略』の出版が記事になっている（『東京新聞』2018.9.19 朝刊）。ここではポートランドを「米国一暮らしやすい」と紹介、路面電車、公園、住民参加などの言葉が使われている。これはid9と関係する。

新潟でのイベントは、新潟県建築士長岡支部による開催で、顧問の渡辺斉氏がポートランドのまちづくりについて紹介した（『建設工業新聞』2018.10.30 新潟版）。長岡市ではながおか市民協働センターにより11月にもイベントが行われている講師は、id4の書籍編集者である吹田氏である（『新潟日報』2018.11.17 朝刊）。この記事では「全米一住みたい都市」とポートランドが紹介されている。吹田氏は、富山県の魚津商議所青年部国際交流委員会の例会でも講師を務めている（『北日本新聞』2018.11.19 朝刊）。

11月に福岡市長選挙に関連して現職の高島宗一郎市長が「すでに米ポートランドなどの先行事例を視察」（『西日本新聞』2018.11.9 朝刊）との記述がある。

和歌山でのイベントは、渡部幹雄・和歌山大付属図書館長の講演会『「智のしくみ」について考える ポートランドのまちづくりを例に』とのタイトルの講演会のイベント告知である（『毎日新聞』2018.11.14 朝刊、和歌山）。

既存メディアの報道は、ほとんどがイベント告知かレポートであり、現地取材を行った記事や研究を詳細に紹介した記事は調べた範囲では存在しなかった。全国紙だけでなく、西日本新聞、中日新聞といったブロック紙、新潟日報、北日本新聞といった地方紙、さらには建設工業新聞といった業界紙が扱っており、各地でイベントが開催されていること、首長の報告や選挙での言及があることから、まちづくりに関連する人たちにポートランドは注目されていることが分かる。

新聞記事のほとんどは文字数が少ないイベント告知かレポートであり、ポートランドの「米国一暮らしやすい」「全米一住みたい都市」というお決まりの紹介フレーズや路面電車や公園などの「おしゃれでエコなりノベーション」という表象をなぞるにとどまっており、ジャーナリスティッ

クな深掘りが行われた記事は見当たらなかった。

7. 書籍とイベントが生む（誤解された）表象

ここで、サイトと新聞記事の関連性に気づくことになる。保坂世田谷区長 (id9, 2-7), コーディネーター山本氏 (id10, 2-2), 雑誌「MEZZANINE」編集長でコンサルタントの吹田氏 (id4, 2-11, 2-12), 山崎氏 (id5, id13, 2-3) とサイトと新聞記事のどちらにも登場する人物がいることだ。山崎氏はポートランド市開発局国際事業開発オフィサーを務めている。なお、2-5の記事で紹介されている「世田谷ポートランド都市文化交流協会」の発足イベントは、東京都市大学の涌井史郎特別教授による基調講演があり、保坂市長もスピーチを、吹田氏がゲストスピーチを行ったことがイベント告知サイトに記載されている¹³。

これらの登場人物に共通するのが書籍である。山崎氏は、id13の著者であり、2016年にも『ポートランド 世界で一番住みたい街をつくる』(学芸出版社)がある。吹田氏は、id4だけでなく2010年に『グリーンネイバーフッド—米国ポートランドにみる環境先進都市のつくりかたとつかいかた』(織研新聞社)を出版している。山本氏関わったという『プレイス・ブランディング』は電通 abic project の編集で、イベントに登壇していた長尾准教授は著者である。

そこで、ポートランドに関連した書籍を確認するため Amazon に「ポートランド」とキーワードを入力し、検索結果を整理して表3にまとめた。吹田氏の3-1は早い時期に出版されている。その後、カルチャー誌であるポパイやスペクテイターが取り上げ、2018年になるとまちづくりだけでなく、旅行やスイーツの関連本も含めた刊行が相次いでいる。

¹³ <https://www.kokuchpro.com/event/psace/>

表3. 2018年末までに出版された「ポートランド」に関連する書籍の一覧。2018年に出版された書籍をグレーで表示している。筆者作成。

id	出版年月	タイトル	編著者	出版社
3-1	2010年8月	グリーンネイバーフッドー米国ポートランドにみる環境先進都市のつくりかたとつかいかた	吹田 良平	織研新聞社
3-2	2014年6月	POPEYE (ポパイ) 2014年7月号「ポートランドに行ってみないか？」		マガジンハウス
3-3	2015年9月	スペクテイター 〈34号〉ポートランドの小商い	エディトリアル・デパートメント (編集)	幻冬舎
3-4	2016年5月	ポートランド 世界で一番住みたい街をつくる	山崎 満広	学芸出版社
3-5	2017年4月	ポートランド・メイカーズ クリエイティブコミュニティのつくり方	山崎 満広 (著, 編集)	学芸出版社
3-6	2017年6月	米国ポートランドの地域活性化戦略: 日本の先をいく生活スタイルとその充実	宮副謙司, 内海里香	同友館
3-7	2018年4月	歩粉のポートランド&パークレー案内: スイーツとオーガニックフードを楽しむ	磯谷 仁美	誠文堂新光社
3-8	2018年4月	ポートランドの衝撃	DJむつみ	流行発信
3-9	2018年4月	MEZZANINE VOL.2 アマゾンエフェクト ミーツ ポートランド	吹田 良平 (編集)	トゥーヴァージンズ
3-10	2018年4月	プレイス・ブランディングー 地域から“場所”のブランディングへ	電通 abic project (編集)	有斐閣
3-11	2018年8月	〈暮らしやすさ〉の都市戦略ーポートランドと世田谷をつなぐ	保坂 展人	岩波書店
3-12	2018年8月	緑あふれる自由都市 ポートランドへ 最新版 (旅のヒントBOOK)	百木 俊乃	イカロス出版
3-13	2018年11月	ポートランド地図帖ー地域の「らしさ」の描きかた	デービッド・パニス, ハンター・ショーピー	鹿島出版会

ここまでの結果を整理すると、1)Google の検索結果に表示されるサイトにはミドルメディアが含まれている、2)既存メディアではポートランドを大きく扱っておらずイベント告知やレポートの新聞記事が中心、3)書籍が2018年に集中的に発売されている、ということであった。そして、1)や2)は書籍を紹介したり、書籍を執筆したりしている著者らのコメントなどを扱っている。なお、id5 まち座は、山崎氏の書籍の出版元である学芸出版社編集部が運営するウェブマガジンである。つまり、書籍とイベントの組み合わせによる情報発信がインターネットの都市表象に影響を与えていたことになる。

「第二部」において吹田氏、山崎両氏について触れた箇所がある。

吹田氏に対しては、「全米都市の病という都心部の社会問題と、西郊に拡散している自動車郊外を無視し (中略)、「エコでおしゃれなりノベーション」という読み間違いをして観光地化に一役かった」(位置No.586)。山崎氏については、誤解されたままの「エコ」を発信しており、「多額の収入確保と交通インフラによる表象構築のための支出という経済活動を行い、市民がそれに賛成しているということを日本人から隠している」(位置No.610)と厳しく指摘している。

書籍とイベントが「おしゃれでエコなりノベーション」という (誤解された) 表象を生んでいるが、それに対する対抗的な言論も検索結果には存在している。それが、id11 コロカルの記事と id3 の愛知県東浦町長の研修レポートである。このレポートはポートランド州立大学による研修プログ

ラムに参加したもので、PDF形式で47ページにわたる「真摯でバランスの良い報告書」（位置No.498）である。

8. ハックされるネットの都市表象

「オープンソース・ジャーナリズム」の手法を用いた調査で明らかになったのは、容易に検索結果が「おしゃれでエコなりノベーション」という（誤解された）表象に支配されてしまったこと。そして、それに対するジャーナリズムの脆弱さである。書籍を発売し、イベントを行えば、その告知とレポートが検索結果に影響し、都市表象を作り出すことができってしまう構造が存在していた。

（誤解された）表象を利用し、もしくは作り出してビジネスを行うことは一概に否定できない。「おしゃれでエコなりノベーション」という表象を浸透させ、まちづくりの代表事例として注目を得たことはプロモーションを仕掛けた側としては成功と言える。その一方で、インターネットにおけるポートランドの都市表象は、市関係者やコンサルタントによりハック（ハッキング）¹⁴されたともいえる。このように容易にハックができる構造は、プロパガンダやフェイクニュースに利用される可能性もある。

インターネットの都市表象が容易にハックできるのは、（誤解された）表象に対抗する id3 と id11 のような言論の利用しづらさにもある。検索結果に表示されていたとしても、他のミドルメディアに比べると読者の目に届きにくい。id3 はPDF形式であり読み込みに時間がかかる場合がある。また、報告書の形式であり記事形式に比べると読みやすさが乏しい。id11 の記事はタイトルにポートランドとはあるものの、リードには「〈この連載・企画は…〉北海道にエコビレッジをつくりたい」と記載されており、ポートランドの話は読み進めなければ出てこない。

一方、「薄い記述」の id8 と「プロの取材というよりは観光客の誤解のよう」な id10 は、インターネットのミドルメディアに典型的なまとめ記事のスタイルをとっている。まとめ記事のスタイルとは、見出し、写真もしくは図表、テキスト（他のサイトへのリンクやネットの反応と呼ばれるコメントの場合も多い）が繰り返されるもので、キャッチーな見出しと写真で読みやすいものとなっている。まとめ記事のスタイルは、テキストを読み込まなくても、なんとなく分かることが目的とされているスタイルである。id8 の「真実」id10 の「王様」といった刺激的なキーワードを入れたタイトルも、分かりやすさを重視したものだ。

これら記事スタイルやタイトルの特徴を踏まえれば、Google でポートランドを検索すると対抗的な言論に触れるよりも、（誤解された）表象にたどり着きやすい状況となっていることもインタ

¹⁴ ハッキングとは「コンピューターに関する高い技術力や豊富な知識をもつ者が、プログラムを解析して巧妙に改良したり、コンピューターネットワークの安全性を検証したりすること」（デジタル大辞泉）<https://www.weblio.jp/content/ハッキング>であるが、ここでは Google の検索結果を自らに都合が良い記事が表示されるように取り組むことを示す言葉として利用している。

ーネットの構造的な課題である。

ジャーナリズムの脆弱さは、既存メディアとウェブメディアの双方にある。

既存メディアの報道は、ほとんどがイベント告知かレポートであり、まちづくりのような専門的なテーマをイベント記事でしかカバーできない現実を示している。2-9の選挙報道でも触れられているようにまちづくりは地域の将来や政治とも関係する重要なテーマであるが、マスメディアであった新聞は、専門的な話題やオルタナティブな話題を扱うことが難しい。そこをウェブメディアがカバーするようになっている。

そのウェブメディアだが、先述したように（誤解された）表象にたどり着きやすい状況にある。匿名執筆者による内容の薄さが指摘されていた id8 は、2016年に公開され、2017年、2020年と二度更新されている。これは Google の検索結果のランキング順位を向上させるために使われる手法である。検索結果を表示するアルゴリズムは非公表であるが、新しいサイトが有利だとされており、サイトを更新することでランキング順位を向上させようとしていると考えられる。また、記事内にあるリンクは TABIPPO 内の他ページに貼られており、TABIPPO 内での相互リンクにより多くのページビューを獲得することを目的としていることが分かる。

また「彼らも直感的に、今日日本で流通する当市表象の虚構性は理解しているようだった」（位置No.623）と付記したid10ジモコロの記事だが、トレーニングを十分に受けてはいないライターが虚構性を理解しているとは考えにくく、インタビュー相手に依存していると考えられる。むしろ、ミドルメディアにより表象を薄くコピー&ペーストした記事が量産される可能性が高い。その理由は後述する。

9. 劣化コピーとこたつ記事の危険性

本稿では、矢部さんが留学先のポートランドを対象にした都市表象研究を手がかりとしてインターネットにおける都市表象とミドルメディアの関係に注目し、書籍とイベントがミドルメディアを通して検索エンジンの結果を左右し、（誤解された）表象を生み出していたことを明らかにした。なお、本稿の調査の限界として対象が13サイトと少ないため限定的な調査になっていること。「第二部」における収集日は2019年2月12日であり、現在とは検索結果に表示されるサイトが異なることは留意しておきたい。

本稿で明らかにした、ミドルメディアにより検索結果をハックする手法は、インターネットで繰り返し問題を引き起こしてきた手法と同じである。

2016年大手ネット企業DeNAは、組織的にコピー&ペーストによる記事を量産する仕組みを作り上げ、不正確な医療情報を大量に公開するウェルク問題を引き起こし批判された¹⁵。既にアクセスできなくなっている id7 のNAVER まとめは「無断転載やフェイクニュースの温床との指摘もあっ

¹⁵ <https://toyokeizai.net/articles/-/147045>

た」と朝日新聞デジタルは報じている¹⁶。ウェルクや NAVER まとめは、大手企業が運営していたため批判されたが、簡単にページビューを獲得し、収入を得ようとする手法は消えていない。むしろ、既存メディアにまで広がりを見せている。

その手法が「こたつ記事」と呼ばれるものだ。「こたつ記事」は現場に取材にいかず、事実確認が不十分なこたつでも書けるという意味だ。ウェブメディアから、スポーツ紙などにも広がっている手法で、「スポーツ新聞社が謝罪や訂正をする事態が相次いでいる」¹⁷。インターネットの登場で影響力を低下させてきた新聞社が「こたつ記事」に手を染め「話題の捏造」を引き起こす（藤代 2021）事態すらある。都市に限らず対抗的な言論は脆弱になり、薄い表象を量産する危険性は高まる一方である。

「こたつ記事」を批判的に指摘したが、本稿で用いた「オープンソース・ジャーナリズム」の手法は現場に取材にいかないという点では同様である。他のデータを組み合わせて立体的に事象を見てはいるが、ポートランド市が発行した資料や登場人物の過去インタビューの確認などできることはまだ多い。劣化コピーをつくることは簡単であるが、（誤解された）表象を検証し、対抗的な言論を打ち出すことは簡単ではなく、その構造をどのように変えていくかがこれからのメディア社会の重要なテーマとなるだろう。

10. おわりに

矢部さんと土橋さんの研究調査助成のタイトルは「ソーシャルメディア環境におけるニュース受容の実態解明とミドルメディアの再デザイン」であった¹⁸。これまでインターネットの都市表象にはほとんど関心を持たなかったが、本稿によりインターネットの都市表象についてもミドルメディアの再デザインの必要性を確認することができた。だが、都市とミドルメディアの関係は、冒頭に紹介した矢部さんのコメントを考えれば、より広く捉えられそうだ。

都市と公園、都市と地方、都心と郊外、パブリックとプライベート空間的、などの間にもミドルメディアは存在しているのではないか。スターバックスに代表される「サードプレイス」も（小笠原 2019）公園同様に都市のミドルメディアとして位置づけられるかもしれない。IoT（Internet of Things）により家電や車などのメディア化が進むと、ミドルメディアの再デザインの範囲はさらに拡大するだろう。それはメディア社会学が将来取り組む研究を示唆している。

矢部さんと研究調査助成を申請することになったきっかけを改めて確認したところ、2016年に始まったメディア社会学に関する議論であった。水島宏明さんの上智大学への移籍、市ヶ谷への移転議論などの課題が山積みで大きな転換点にあった。何人もの同僚から「矢部さんは将来の議論

¹⁶ <https://www.asahi.com/articles/ASNB14HN5NB1UTIL014.html>

¹⁷ (Media Times)「こたつ記事」, 謝罪・訂正続々 (『朝日新聞』2020.12.19 朝刊)

¹⁸ <https://www.taf.or.jp/files/items/1560/File/土橋臣吾.pdf>

に欠かせない」という話があり、色々な話をするようになった。議論というよりも、ほとんどの場合、矢部さんがニコニコしながら聞いてくれるものであった気がするが、これからメディアを学ぶにはプログラミングやデータ分析が欠かせないという方向性には強く同意してくれた。その方向性は着実に実を結びつつあることを矢部さんに伝えたいと思う。

参考文献：

藤代裕之（2014）「誰もがジャーナリストになる時代——ミドルメディアの果たす役割と課題」（遠藤薫編著『間メディア社会の〈ジャーナリズム〉——ソーシャルメディアは公共性を変えるか』東京電機大学

藤代裕之（2017）『ネットメディア覇権戦争——偽ニュースはなぜ生まれたか』光文社

藤代裕之編（2021）『フェイクニュースの生態系』青弓社

法政大学メディア環境設計研究所編集（2020）『アフターソーシャルメディア 多すぎる情報といかに付き合うか』日経BP

小池太輔・渡辺仁史（2012）「ソーシャルメディアのテキスト情報に現れる都市イメージの抽出」『日本建築学会関東支部研究報告集』82, pp457-460

小笠原伸（2019）「都市」『ソーシャルメディア論・改訂版』青弓社

矢部恒彦（2019）『住んで協働してわかった「米国オレゴン州ポートランドのまちづくり」の仕掛けと、ぼくたちへのヒント』Kindle版

矢部恒彦（2019）『続「ポートランド」ロマンス都市の誕生：—「まちづくりは、つちづくり」ではなく、表象インフラ整備とコンド誘致，観光客への戦略的広報—』Kindle版

宇田川敦史（2019）「検索エンジン・ランキングのメディア史:パソコン雑誌における検索エンジン表象の分析」『マス・コミュニケーション研究』94, pp131-149